

研究成果の報告状況

本研究は、以下に示す学術論文および学会発表等で報告した内容に基づいて構成されている。なお、本論文構成との対応を、各研究成果の末尾の〈 〉内に示した。

1. 発表論文

- 1) 豊田則成・中込四郎 1996 運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐって 体育学研究, 41, 192-206. 〈第5章〉
- 2) 豊田則成 1999 アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究 - 中年期危機を体験した元オリンピック選手- スポーツ教育学研究, 19, 117-129. 〈第6章〉
- 3) 豊田則成・中込四郎 2000 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討 体育学研究, 45, 315-332. 〈第1章〉

2. 学会発表

- 1) 豊田則成・中込四郎 1994 運動選手の競技引退に関する研究 - 自我同一性の再形成をめぐって- 日本体育学会第45回大会号:219. 〈第5章〉
- 2) 豊田則成・中込四郎 1995 競技引退における「同一性再体制化」のタイプとその特徴-元学生競技者を対象として- 日本体育学会第46回大会号:247. 〈第4章〉
- 3) 豊田則成・中込四郎 1997 プロサッカー選手のキャリア移行に関する研究 日本体育学会 第48回大会号:217. 〈第3章〉
- 4) 豊田則成・中込四郎 1997 プロサッカー選手のキャリア移行の実態 日本スポーツ心理学会第24回研究発表抄録集 〈第3章〉
- 5) 豊田則成・中込四郎 1998 元スポーツ選手の競技引退に伴う同一性再体制化プロセス 日本体育学会第49回大会号:234. 〈第6章〉
- 6) 豊田則成・中込四郎 1998 競技引退を通じて体験される時間的展望 - 中年期危機を体験した事例から- 日本スポーツ教育学会第18回大会抄録集:45. 〈第6章〉

3. 研究助成

- 1) 豊田則成 1998 スポーツ競技者の競技引退に関する研究-プロ競技者とアマチュア競技者との比較から- 平成9年度笹川科学研究助成(課題番号:9-022) 1-13. 〈第3章〉

あとがき（謝辞にかえて）

日本のお家芸、「柔道」。女子 48kg 級の田村亮子選手と男子 60kg 級の野村忠宏選手が揃って金メダルを獲得するという快挙によって、今世紀最後のオリンピックの幕は切って落とされた。このことは、まだ記憶に新しい。8 年間にも及ぶ臥薪嘗胆から悲願の金メダルを獲得した田村選手と、2 大会連続の金メダル獲得は日本柔道界史上 2 人目という野村選手。爽やかな君が代の調べの中、表彰台の真ん中で感慨無量に瞳を輝かせながら、上る日の丸を見つめる姿に胸が震えた。一方、寸での所で金メダルを逃した男子 100kg 超級の篠原信一選手。主審の判定に物議を醸し出していたマスコミを「弱いから負けただけ…」と一蹴し、潔さを見せつけた。「世界最強の銀メダリスト」と評された彼の胸中にはいかばかりだったのか。また、女子マラソンの高橋尚子選手の圧倒的な速さに翻弄され、レースに呑み込まれていった市橋有里選手。高橋選手と小出監督の師弟関係に多くの賞賛の声が送られる中、眼を潤ませていた彼女は何を思っていたのだろうか。悲喜交々のオリンピックの移ろいは、あまりにも多くのストーリーを彷彿させる。

筋書きのないドラマの裏に潜むアスリートの思いを憶すると、ふと、彼らのこれからの歩みに思いを馳せてみたくなる。彼らは、「オリンピック」をひとつの通過点として、その後の人生を歩いていくことになる。彼らは“「オリンピック」から何を学んでいるのだろうか”。本論執筆中にあった著者は、研究活動を通じて得た「学び」と彼らの「快挙」とを、無謀にも重ね合わせていた。

思い返せば、この 2 年前の長野オリンピックの開催期間中に、著者は、かつて世界の檜舞台で頂点に立った「金メダリスト」にインタビューす

る機会を得ていた。大雪の中、2時間近くも電車で揺られ、ようやく到着したホテルの一室で、著者は金メダリストを待つこととなった。そして、アポイントの時間通りに姿を現した金メダリストは、小柄で愛嬌のある笑顔で著者を受け入れてくれた。挨拶もそこそこに始められたインタビューは、終始、金メダリストのペースで進められていった。能弁とでも言うべきなのだろうか。流れるような口調の中にも、言葉の一つひとつに拘りが見え隠れする。笑みを浮かべながら話す姿には、こちらを多分に気遣う気配も感じ取れた。そして、小一時間が経過し、無事に初回のインタビューが終了していった。

帰り際に、「飲みにもいきましょか?」と、お誘いを受けた。調査の枠組みの中で得られる情報は、こちらが準備した仮説を検証する立場を採るためか、なかなか奥に踏み込めないという感を拭えない。「これは、ある意味知見を深めるチャンスだ!」と思い、即、杯を交わすことに応じた。2人してホテル近くにある料理屋の暖簾をくぐった。郷土料理を振る舞う店に心が和み、「金メダリスト」の唇も、杯も、時間の経過と共に軽快になっていく。著者よりも小柄で、親子ほどの歳の差がある金メダリストの飲みっぷりたるや、実に「圧巻」の二文字に尽きた。まさか、こんなところで「金メダリスト」の片鱗を垣間見ることになるとは思ひもしなかった。というのも、「金メダリスト」は、酒を注ぐや否や杯を一気にノドに放り込む。それが何度も何度も繰り返されていくのである。しかし、それでも尚、凜とし、毅然と会話を楽しんでおられる。これには流石に驚いた。そんな驚きと共に、楽しい宴は、時を刻んでいった。そこでは、インタビューの中では得られなかったようなエピソード、華々しい活躍で綴られるはずであった金メダリストの隠れた一面が、次から次へと関を切ったように溢れ出していく。「私のような

人間はいい例です...」と語る金メダリストの人生は、まさに数奇に富んでいた。その会話の中で、著者は、どれほど多くを学んだことだろう。氏に感謝の念が絶えない。

本論を閉じるにあたって、実に多くの方々に感謝の意を表さねばならない。しかし、調査に御協力いただいた方々は、個人のプライバシーを考慮せねばならないために、ここでお名前を挙げることはできない。氏たちの協力なくして、本研究をなしえることはできなかつたことは言うまでもない。

指導教官である筑波大学体育科学系助教授の中込四郎先生には、万斛の言葉をもってしても感謝の意を表すことはできない。先生には、研究の“いろは”はもちろんのこと、生き様までを教えていただいたように思う。怠惰で、つつい依存的になってしまう著者を、常に温かい眼でお導きいただいた。また、先生のご厚意によって二度にわたる科研費助成の研究プロジェクトに参加させていただいたことは、我が身をトレーニングするための絶好の好機となった。本論の多くの部分は、こうした先生の過分の御配慮によって成り立っている。

副査である同助教授の松村和則先生には、研究の“豪快さ”を学んだ感がある。地道なこの研究の完成のために、刺激的な教育の手を差し伸べていただいた。また、先生と韓国への調査渡航の機会を得たときは、先生のフィールドワークの片鱗を直に目にする機会に恵まれた。その時の迫力には、感銘さえ覚えた。

また、副査である同教授の高橋健夫先生には、未熟で意固地な著者の心を開いていただいたように思う。自称「愛の高橋」とされる先生から受ける御指摘からは、これからの体育・スポーツ科学に携わる者としての心構えを御指南頂いたようにも思えた。

筑波大学体育心理学研究室においては、同助教授であられる吉田茂先生に、公私ともに御心配をおかけしている。著者の弱くだらしない生き様を、先生は常に温かく、時に厳しくお導きいただいている。酔った席で「困ったら俺のところにこい！」とお言葉をかけていただいた時、著者はあまりの嬉しさに号泣してしまった。

静岡大学の伊藤宏先生を、まずもって“命の恩人”と称さなければならぬ。著者が途方に暮れ、路頭に迷う最中、研究の世界へ入るよう強く背中を押していただいた。先生との出逢いがなければ、今ここにいなかったかもしれない。

関東学園大学の高瀬博先生には“体育人”としてのお導きを頂いた。先生とのお話の中で、どれだけ自分の人生を振り返ったことか。著者にとっては“人生の師”でもある。

研究室の同僚たちにも、感謝の念が絶えない。彼らと過ごす時間は、多くの示唆と溢れんばかりの支援で満ちていた。どうもありがとう。

家族には、どうやって感謝の意を表せばよいだろう。著者が、勝手気まま、思い通りに生きることに対して、両親は常に支援的であり、最大の理解者であってくれる。ふたりは人生の目標である。

論文執筆を終え、率直に感想を述べると、「ようやく辿り着いたか…」というのが正直なところである。やり残したことの多さに、ようやく気づき始めた感もある。

これから課程博を“引退”し、新たな一步を踏み出すことになる。なるほど、こうしてアイデンティティ再体制化は始まるのかと、今、身をもって体験しているのかもしれない。

平成 12 年 12 月 4 日 記す

豊田 則成